

入院をきっかけに不安が高じた児への安心感を醸成し、意欲や対人意識の広がりを促す支援の報告

社会福祉法人楡の会
武部 裕子

キーワード：脳性麻痺，筋緊張亢進，好い事作り療法

【はじめに】

社会福祉法人楡の会（以下、当施設）では、児の思いを捉え、その思いに凶星を言い当て気持ちを受け止めることを通し、支援対象児の様々な意欲を引き出す“好い事作り療法”を実践している。脳性麻痺男児（以下、児）に対しても“好い事作り療法”を実践し、チアノーゼを伴う筋緊張亢進状態を緩和することができた。また意欲の向上や対人意識の広がりから“何気ないおしゃべり”を落ち着いて楽しむまでに至ったので経過を報告する。

【対象】

7歳 男児 脳性麻痺 超低出生体重児

1歳から当施設を利用。快・Yesは「笑う」「瞬き」、不快・Noは「泣く」「筋緊張亢進」で表現。4歳4か月時、筋緊張コントロール困難の為、1年余り入院。胃瘻造設、気管切開術等様々な治療を受けた。7歳8か月時、感染症による呼吸状態悪化の為ICUに入院した事をきっかけに不安が高じ、チアノーゼを伴う啼泣と全身の筋緊張亢進状態を度々呈した。

【方法】

週1回程度、当施設で好い事作り療法を実践し、児の様子を観察・分析した。

【結果】

チアノーゼと全身の筋緊張亢進状態を繰り返した時期は、児の好きな横抱きで声掛けやポジショニングを行い、リラックスを促した。筆者と目を合わせないが筆者が視線を逸らすと啼泣する為、筆者の動きを予告し了解を得た。児が光に注目していると気づき、光と音楽の活動を行った。筆者の声かけに応じた表情や頷きで意思表示可能となり、児の意思を取り入れて活動した。どの活動にも“No”を示す時は横抱きで会話し、「これが嫌だったね」「焦っちゃったね」等気持ちの代弁をした。5か月目、筆者と目が合うようになりチアノーゼは消失した。一方、活動中に突然泣き出す様子が定期的であり、尿意の表出と仮定して尿器で排尿を試みると成功した。誉められると尿器の排尿に固執し、失敗すると泣いて筋緊張亢進した。尿意時はいつでも付き合う事を伝え、失禁時は児の好きな抑揚をつけた声掛けをすると笑顔になり、“失敗しても次がある”という気持ちを作ることができた。7か月目、利用児Bちゃんとの活動が可能となったが、散歩には泣いて不安を示した。児を励まして5分程散歩し、「ドキドキしたけど大丈夫だったね」「Bちゃんがタンポポくれたね」など振り返りを行うと、“頑張れた”“楽しかった”を自覚するように笑った。他の活動でも振り返りを意識した言葉掛けを継続し、エアポリンやクッキングなど楽しむことが増えた。12か月目、リラックスした様子で筆者、Bちゃん、他の職員の会話を聞いて笑い、「4人であるのが楽しいね」と声を掛けると笑顔と発声で応えた。

【考察】

好い事作り療法の実践が安心感を醸成し、相対的に不安が減るに従ってチアノーゼを伴う筋緊張亢進状態を緩和することができた。尿器での排尿成功が意欲の向上に繋がった。安心と意欲が増すに従い、対人意識の広がりが促された。今後も好い事作り療法の実践を積み重ねていきたい。